

## 要旨

『柔らかいガラスから感じる人間の姿』

東京藝術大学大学院  
美術研究科 博士後期課程  
工芸研究領域（陶・磁・ガラス造形）  
1322914 小松 実紀

本論文では「なぜガラスから人間の存在を感じるのか」という問い合わせ軸に、筆者の制作と多角的な考察を通してガラスの新しい見え方を探ってきた。高温で溶けて液体のような状態のガラスは、内臓や血液、皮膚といった身体を想起させるものがある。こうした感覚がどこから生まれるのかを解明するために、筆者は自身の身体感覚と向き合いながら人間を生物的な視点から考察し、ガラスという素材と照らし合わせて捉え直してきた。

第1章では、人間の身体における「膜」に注目し、細胞膜や皮膚のように外と内を隔てながらつなぐ構造が、吹きガラスで生まれる膜状のガラスと重なることを考察した。ガラスが閉じきらず、かといって開ききってもいらない構造を持つことは、生命を維持する膜のあり方と共に通しており、そこに人間的な存在が立ち現れることが明らかになった。また皮膚は、個性や感覚、他者との関係を担う身体要素でもあり、筆者の作品において単なるモチーフではなく「人間の存在を証明するもの」として重要な意味を持っていることが明らかになった。

第2章では、「柔らかいガラスから身体を感じるのはなぜか」という問い合わせ軸に、ガラスの形態や質感と人間の身体との類似性を探った。高温で液体のような状態となるガラスが有機的な形をとることと、人間の身体も生命の始まりにおいて液体的な状態から形成されてきたという生物的事実が重なり、両者に共通する状態が見えてきた。また吹きガラスの制作では、体内から吹き出された空気がガラスの中に送り込まれ、袋状・筒状の空洞構造が自然と生まれる。そのかたちは、消化管のように身体内部を通る空気の通り道を思わせ、吹き上がったガラスが身体の一部を外在化したようにも感じられる。こうした形態と制作行為の関係からガラスと身体構造の具体的なつながりが見えてきた。

第3章では、目には見えない人間の痕跡として体臭に注目した。体臭は、記憶や他者との関係、自己の存在と深く結びついている。その痕跡をガラスで可視化する筆者の作品において、人間の生々しさや温かみを感じさせる有機的な造形が生まれた。また、他のガラス作家が冷えて固まった透明なガラスに不可視の存在を託すのに対し、筆者は熱を帯びて変化し続ける制作過程のガラスにこそ、人間の身体性を見出していることに気づいた。さらに、身

体を直接モチーフにしていない作家の作品においても「制作の集積による存在の確認」「素材・方法・身体の運動」「呼吸の可視化」という三つの要素が、人間の存在を立ち上げる要因となっていることを考察した。

第4章では、制作環境の変化によって扱う技法や作風がどのように変容したかを論じた。各技法の特徴とそれぞれの技法による制作体験、作品を通して、技法の変化がガラス表現に新たな広がりをもたらしたことを考察した。特に筆者が独自にたどりついた技法であるガラス泥漿鑄込みによって作風が大きく変化した過程を明らかにした。様々な技法を用いながらも「ガラスが溶ける」という物質的プロセスを通して、人間の身体性を探求する一貫した視点が、制作全体を貫いていることを示した。これらの考察を踏まえ、博士審査作品についても論じている。

論文を執筆する過程で明らかになったのは、ガラスを扱うという行為そのものが筆者の身体感覚や存在の輪郭を探る営みと重なっていたということである。特に熱を帯びたガラスを扱う瞬間の集中や、身体の動きがそのままかたちとなって現れるプロセスにおいて、筆者は自分の内側と外側が接続されるような感覚を抱いている。空気を吹き込むことで内側の感覚が外部にあらわれていく制作の経験は、自分の一部が目の前に立ち現れるようでもあり、それが人間の存在を探る姿勢へつながっていく。

こうした一連の制作と考察を通じて、筆者はガラスを単なる物質や視覚的な素材ではなく、人間の身体性や存在の気配を映し出すものとして捉え直す視点を得た。ガラスのもつ流動性や熱を帯びた状態から冷えていく過程の中に、人間と重なる構造や感覚が内在していることが見えてきたのである。それは、従来の硬く冷たいガラスというイメージとは異なる、「生きているガラス」「人間に似たガラス」という新たな考え方であり、この視点はガラスを単なる素材や造形の対象としてだけでなく、身体を宿す存在として捉える新たな価値の可能性を示している。

今後の展望として、筆者はこれまで自身の存在を確かめるために制作を行ってきたが、今後は鑑賞者が自らの身体感覚や存在と向き合える空間の創出を目指したい。視覚的な美しさに留まらず、記憶や感覚を呼び起こす媒体として、深い対話の場となるガラス表現を模索していく。また、吹きガラスや泥漿鑄込みなど複数の技法を通じて、技法の差異が生み出す思考の変化や形態の違いに注目しつつ「人間とは何か」という根本的な問いを、より多角的に考察していきたい。